
2012年12月22日（仮）

尾澤恒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2012年12月22日（仮）

【Nコード】

N1891BA

【作者名】

尾澤恒

【あらすじ】

現実にファンタジーの世界を取り入れた作品です。

ある種優れているのにそれに気づかないで自分を責めてしまうような人が登場し、

世界を変えていこう、自分自身もかえようといったファンタジーです。

ちょっとした恋愛も入れようと思うのでご期待下さい。

いろいろなジョブも登場させようと思います。

主だったジョブはゲームマーです。

そして最近の時事や歴史的要素も取り込もうと思います。
楽な気持ちで読んで頂ければ幸いです。

プロローグ

2012年12月22日 その日全てが変わった。

とあるブログにて

みなさん

今年も残りわずか

クリスマスも近いこの時期になると

彼女がほしくなりますね（笑）

これを言い続けて、早6年

PCの前のあなたはどうですか？

さて、ここで話は変わりますが

明日は、今話題？の“マヤ暦”で予言されている

第4の文明が終わり

第5の文明が始まる日、だそうです。

明日は何かが起こるのでしょうか？

わくわくしますね（笑）

ヒヤッホウウ

すみません

舞い上がりました（照）

それではまた明日

アディオス（、・・・）ノ

俺が外の喧騒によって目が覚めたとき、すでに世界は変わり始めていた。

「なんだよ。うるさいな。」

外を見るとパトカーやら野次馬やらであふれかえっていた。これは野次馬を体験できるいい機会だ。やってみるか。

「何か、あつたんですか？」

「あら、小森さん。お久しぶりね。今朝起きてごみ出ししようと外に出たらね、道路にいくつも扉があつたのよ。不思議に思わない。それで警察にでんわしつてわけなのよ。それでねこの話には続きがあつて、」

「へえ、そうなんですか。ありがとうございます。」

危ない危ない人生初の野次馬がいやな思い出になるところだった。人選ミスったな。でもさすが俺、引きこもりがちで常日ごろからあまり人とかかわっていない俺だからこそなせる技だな。うん。常人ならば、あのおばさんの長話に延々と付き合わされていただろう。

まあ、なんとなくだが何かが起こっている事は確かだろう。俺自身気になることもいくつか出てきたしな。ここは文明の利器で、俺の宝であるパソコンを使うほかないだろう。インターネットのニュースによると世界各地で同じような現象が起きているようだ。さらにはマヤの予言的中かというように見出しの記事まで出ていた。これ

はもしかすると俺のブログである“大洋のつぶやき”も何かしら反応が出ているのではないか？そう思い聞いてみると、そこには見たこともない光景が広がっていた。

「ブログ炎上来たー！！こ、これが芸能人や限られた一部の人間だけが体験できるという、あれか！！！」

そこにはみんなの疑問や感情が書き殴ってあった。

それだけみんなテンパっているということなのだろう。それはそうだ。俺だってテンパっているのだから。しかし実際体験してみると一体これはどうしたものか？ふむ考えること13分俺は一つの結論を下した。

『皆さん、少し落ち着きましょう。私だって何が何やら分からない状況なんです。だから協力しませんか？我々の聖地である秋葉原に集まりましょう。今日の12時に待ってます。』

そう書き残し俺は部屋を出た。電車ちゃんと動いているかなと思いながら。

プロローグ（後書き）

はじめまして尾澤恒です

この作品？が私にとつての処女作になります

まだまだ拙くて見切り発車のような

気もいたしますが

皆様よろしくお願いいたします。

1話

着いた。秋葉原駅前だ！さすがは日本の鉄道職員だ。こんな異常事態でもちゃんと電車を動かしていることに拍手だ。 招集かけた手前もあつて、1時間前に来てみたが早く着きすぎたかもしれない。だが集合場所を見ると6人の若者がいた。これはもしか、本当に集まってくれたのだろうか？

「あの、もしかしてブログを見て、きてくれたかたがたですか？」
スーツ姿の佐々木が答える。

「そうですが、あなたがあこのブログの管理者さんですか？」
「はい、まあそうですね。」

「私普段はレアヴロード社に勤めております。佐々木誠と申します。いつもあなたのブログを拝見させていただいております。今日は会えて光栄です。」

「ご丁寧にもありがとうございます。えーと、俺は作者の小森大洋たいようと言います。早速ですがこれ以上人数もあつつまらないと思いますし、どこかに移動して何か食べながら話しましょうか。」

このメンバー唯一の紅一点、黒髪ショートではっちりとした目が勝ちきそうな雰囲気かまを醸す池田が口を開いた。

「あの、自己紹介とかはしなくていいんでしょうか。」

「大丈夫ですよ、池田さん。俺、みなさんの名前知っていますし。」

「どうして私の名前を？しかも、それってどういうことですか？」

「まあそれについてもみなさんと話したいことなんですけど、とりあえず座って話せる場所を探しましょうよ。」

「わかりました。」

納得のいかない表情で池田はうなずいた。

「本日はお集まりいただきありがとうございます。さて先ほどの事を疑問に思っている方がいるので、そのことについて話しましょうか。これから話すことは嘘と思うかもしれませんが、紛れもない事実です。あと、俺の分かることは正直に話しますんで、みなさんもよろしくお願いします。」

「はい。」

「分かりました。」

「いいですよ。」

「分かった。」

「ういつす。」

「……………」

「よし、じゃあはじめに俺にはみなさんの頭上にゲームのステータスが見えます。」

「えーと、本当ですか？」

「最初に言っただけですよ、正直に言っと。つまりこんな感じですよ。」

池田由希 <small>ゆき</small>	20歳	空手家LV32	HP135	SP109	ヒットポイント	スキルポイント
佐々木誠 <small>かみぬま</small>	28歳	会社員LV38	HP155	SP128		
上沼健太	17歳	剣士LV22	HP165	SP98		
高山祐樹 <small>ゆい</small>	19歳	学生LV38	HP102	SP159		
松田佑磨 <small>ゆうま</small>	19歳	学生LV18	HP124	SP111		
吉野元喜 <small>もとぎ</small>	21歳	ゲーマーLV51	HP119	SP219		

「と、まあ。こんな感じで俺には見えるわけだ。たぶん名前も間違っていないはずだ。どうかな？」

「……………」

「やっぱり信じられないかな？でもこれを納得してもらわないと、藩士が先に進まないんだが……………」

「いや、僕は理解できるよ。」

どう見てもオタクルックスの吉野が賛同する。

「ホントですか！？吉野さん。」

「もちろんだよ。小森氏。なぜなら僕にも見えているからね。」

「えっ。」

「小森氏の言うことが正しければ、僕たちには共通点があるね。」

「共通点ですか？」

「うん。じゃあ今度は僕の見えているものを教えよう。」

小森大洋 20歳 ゲームLv99 Hp202 Sp388

「Lv99かよ。パネツす。小森先輩。」

短髪・茶髪・高身長の上沼が言った。

「いや、それほどでもあるかな。実際ゲームはかなりやりこむしな。そういう上沼だって剣士なんてカッコいいじゃないか。」

「自分は剣道やってるからだと思うっす。でもこれおかしいつすね。」

「そうだな。みんなゲーマーだなんだである前に学生であり社会人であるはずなんだが。うん。吉野さんはどうおもっす。」

「残念ながら小森氏、僕にもわからないな。」

「いや、これは。ふむ。吉野さん、小森君。それぞれみんなの特徴を表しているのではないかな？僕の場合はとても勉強して東京都の頭のいい大学に入学することができたからね。つまり、ぼくの得意分野は学業だよ。」

「ちょっと癩さわ(しゃく)に一障るが、知的な感じの高山は眼鏡をクイツと上げながら言った。

「そーか。じゃあ俺はゲームに命かけてるからゲーマーか。上沼とか池田さんはどうなるんだ。」

「自分は勉強が嫌いなんで、とりあえず剣道してるってカンジっす。」

「私は、勉強は嫌いじゃないけど、空手をずっと続けてるからかな。」

「少し、解決してきたな。じゃあこのLvの差はなんだ？」

「おそらく各々が自分の好きなことにどの位重きを置いていないかによって、変わるのではないか？」

「やっと納得出来た。俺は他に好きな物もないし、勉強もそれほど好きでもないから、Lvも低いのか。」

「うわっ初めて喋ったよ。危うくいるか分からないか分からなくなるところだった。背もそれほど高くないし、太っているわけでもなく、そして髪型も突飛な感じでもない。どっからどう見ても影の薄い普通の感じの青年だな。」

「そういうことになるな。ではなぜこんなことが起きているのか？ということだが、これは扉の出現が関わっているんじゃないかと思うんだが、どうだ？」

「その考えで問題ないと思いますよ。私はそこで、扉の調査に向かうことを提案いたします。」

「それはいいですね。ところで佐々木さんはスーツですけど、会社のほうは大丈夫なんですか？」

「心配には及びませんよ。私の会社は新聞を売って、利益をあげているんですが、こういった事態なので記者ではない私にまで声がかりまして、急ぎよ取材に駆り出されました。困っていた私の前に現れたのがあるブログでした。そしてここに皆さんが集まるというので、お話をうかがいに来たというわけです。いやはや、皆さんの発想想像は目を見張るものがあります。よろしければ正式に取材を受けてくださいませんか？」

「あなたがここに来たのは、そういう魂胆こんたんがありましたか。でも受けたところで俺たちにどのような見返りがありますか？」

「人聞きの悪いことをおっしゃられますね。そうですね、見返りですか。協力していただけるなら、ここでの食事代やその他必要経費、新たな発見があった場合は私が上層部と交渉してそれに見合う報酬を用意させましょう。これでいかがですか。」

「ふむ、俺とは利害関係は一致しますね。でも本当に報酬は用意できてるんですか？」

「報酬については心配しなくていいですよ。私交渉技術には定評がありますので。では他の方々のいかがですか？」

「俺は他にやる事ないんでやりますよ。」

「金ももらえるんなら俺やるっす。それに今がどうなっているかも気になるっすから。」

「アタシもここまで来て何もしないはちょっと嫌だな。」

「僕もその意見に賛同するよ。」

「僕はこれにはリアルRPGの匂いがするからぜひ参加したいね。」

「そうですね。吉野さん、そう思いますよね。夢にまで見てましたから、わくわくしますよね。よしっ、話は決まりましたよ。佐々木さん。」

「そのようですね。皆様ありがとうございます。それでは腹ごしらえと行きましょう。皆さん存分に召し上がってください。」

俺たちは運命の歯車はここから動き始めた。

2話

扉の前までやってきた俺たちは扉にKEEP OUTと黄色のテープが巻かれているのを目にした。

「まあ、これはあれだよな。触れるなっていう警察からのメッセージだよな。みんなどうする？」

「先輩、まだテープが巻かれていない扉探しましょうよ。これだけいろんなところにあるんすから、探せば出てきますって。」

「うん、そうだな。じゃあ佐々木さんはこちらへの店の人に聞き込みに行つて下さい。俺たちは手分けして探そう。あと、見つけた時のためにここで一度連絡先を交換しようか。」

みんなが頷いて交換完了！よしっ！池田さんのアドレスゲット！初めての女の子連絡先だ、わーい。ごほん。

「じゃあ一旦解散。健闘を祈る。」

見つからないし連絡も来ない。かれこれ2時間近く歩いているのに全然見つからない。そんなことを考えていると妙な感じがする。今何を考えていたのだろう。2時間も歩いているのか、ふむ妙だな。普段ならこんな歩けば多少の疲れも感じるはずなんだが。気のせいだろうかまったく疲れた気がしない。そういえば、昨日も遅くまで起きていた割には今日は早く起きたし、いつもある倦怠感けんたいかんもない。これは謎だ。疑問だ。池田さんに連絡できる口実ができた。いや違う、これは断じて違うぞ。そういうやましい気持ちがあるわけではない。ただ純粹に疑問を解決したいだけなのだ。そう思い携帯を手取る。

ん？気がつかなかったが不在着信が入っていた。

「もしもし、小森ですけど、どうかしましたか？」

「ああ、小森さんですか。聞き込みしてたらね雇見つけましたよ。申し訳ありません。手間取ってしまつて。」

俺は思わず空を見上げた。もう少し時間かかってもよかったのに。「?」どうかしましたか?」

「いえ、なんでもないですよ。じゃあ早速集まりましょうか。」

「わかりました。他のみなさんには先に連絡してありますので、ご心配なさらずに。」

「了解です。すぐにそちらに向かいます。」

結局、連絡できなかったな。もしかして、あの男わざとやっていのだろうか?まあいい。早く集まらねば。待たせてしまつて印象を悪くしてはいけない。

「すみません。遅くなりました。」

「いえ、大丈夫ですよ。アタシ達もさつき着いたところですから。」

おお池田さんがかばってくれたのか?うれしい、とてもうれしい。

「ありがとうございます。では早速ですが、その雇はどこに?」

「この店の裏です。店主には許可を取っておりますので行きましようか。」

「行こう。」

「これが各地で出現している雇か、普通の家にあるような雇と変わらないように見えるんだがな。」

「ふむ、確かにそうだね小森君。しかし触れたりしてみたらどうだい。」

「ああそうだな。よしっ触ってみるか。」

「フアイトつす。先輩。」

「頑張つて小森君。あと気をつけてね。」

しゃあつ。悪くない気分だ。女の子に応援されるとここまで違うことなのか。今なら何でもできそうな気がする。いくか、雇に手を

あててみる。何も起こらない。開けてみるか。ガチャツと鍵が開く音がした。

「よしつ。開けるぞ。みんな準備はいいか。」

「うん。」

「うつつ。」

「ええ。」

「問題ない。」

「……………」

扉を引く、その先には見慣れない風景が見える。次の瞬間その風景が目の前にあつた。

「ここはどこだ？そうだ、みんないるか？」

「みんないるよ。」

そつか、ならいい。それから俺たちは少しの間放心状態あつたと思う。今俺たちがいる場所は入ってきた扉と腰の位置まで丈のある草が生い茂っている、草原に立っていた。俺は今までこれほど風が気持ちがいいと思つたことはない。まるで童話の世界にでもいるかのように。

「さてみんな見惚れるのはこの辺にして、これからの事を考えないか。佐々木さん、これは新発見とよんでもいいんじゃないですか？」

「えっ、ああ。そうですね。これは大発見ですよ。皆さんご協力ありがとうございます。」

「いやそれほどの事じゃないですよ。ものは相談なんですがね、報酬の件はいくら位になりそうですかね？」

「上と話してみないと分かりませんが、少なく見積もって10万。反響によってはもっといきますね。でも情報は鮮度が命なので、私はこれからすぐに戻って記事を書くつもりです。」

「分かりました。ではまた何か分かったら連絡しますよ。」

「ほんとうですか！？ありがとうございます。報酬のほうは任せてください。」

「頼みましたよ。じゃあこれから俺は探検するけど、みんなはどうする？」

「アタシも見てみようかな。」

「俺も。」

「僕は今日は遠慮させてもらおうよ。また今度誘ってくれ。」

「おう、わかった。他は？」

「自分先輩にお供するっす！」

「おっ、おう。じゃあ吉野さんは？」

「僕は勿論参加するさ。面白そうだからね。」

「よし決まりだな。俺と池田さん、上沼、松田、吉野さんの5人がこつからが本番だ。きをひきしめていこう。」

「それでは私たちはここで失礼いたします。」

「じゃあまた。今度は一緒に探検しましょう。」

「小森君、上沼君くれぐれも気をつけるんだよ。」

「ちよつと待て、俺も上沼と同じに思われてんのか。俺は筋肉バカじゃねえぞ。」

「先輩、自分の事そんな風に思ってたんスんね。」

「きみをそこまで馬鹿だとは思ってはいないが、きみが気を抜いたらみんなが危険に晒されるんだよ。それは分かっているね。」

「驚くほど自然にスルーっすか。」

「大丈夫だよ。上沼君。頭を使わなくてもなんとかなるって。」

「いや、池田先輩それ励ましになってないっす。はあ〜」

「えっ。なんでだ？」

「だから君は抜けているんだ。さっきから君はリーダーっぽい感じを出しているじゃないか。上に立つ以上はちゃんとしろということだ。」

「そういうことか、それなら心配ないぞ、俺が気をつけなくてもみ

んな、なんとかなるだろうし。きつとうまくいくぞ。」

「ふう、きみの樂觀さ加減にはついていけないな。でも僕がさっき言ったことはちゃんと覚えておくんだ。いいね。」

「ああ、わかったよ。それじゃあな。」

「それではみなさんお気をつけて。」

「失礼する。」

3話

ふと思いついたように小森は話し始めた。

「なあ、さつき扉を探しているときに思ってたんだが、2時間も俺たち探してたのに、どういうわけか全然疲れてる気がしないんだよね。」

「言われてみればそうだね。こんなときに高山君とかがいたら何か答えてくれたかもしれないのに。肝心な時にいないよね。」

お、おう。さらつと毒を吐くなあ池田さん。悪意がないのが余計性質が悪いな。まあそれだけ俺たちと仲良くなったと考えればうれしいが、何か末恐ろしいな。

「そ、そうだね。でもないもんはしょうがないしなあ、俺の考えを聞いてくれるか。扉が現れてから、俺はステータスが見えるようになった。このことは、22日になるまでは考えられなかったわけだよな。」

「うん、そうだよな。」
「うん、そして俺たちは見たこともない風景の中にいるわけだ。つまり、扉が出てきたことよって、何らかの影響が俺たちにでてると考えるのは正しいはずだ。そして、その影響の一つが体になんかしらの力を与えたんじゃないかと考えたんだが、これどう思う?」

「いやあ、先輩の考えすげえっす。自分先輩が何言ってるか全く分からないっすけど、先輩が言うことなら絶対間違ってるなんかいないっす。」

「そうか、まったくわからないのはどうかとは思っが、ありがとな。」

「うっす。」

「でも小森氏の案以外には考えようがないから、今はその考えが正しいと思われるよ。でもやっとなRPGっぽくなってきたねえ、小森氏。」

「そうですね！吉野さん。これでモンスターとか出てきたら、いよいよそれらしくなるんですけどね。あ、でも女子がいるから危険ですかね。」

「む、アタシはそんなにか弱い女の子じゃないよ。なんなら小森君、組手してみる？」

それはご免だ。

「すみませんでした。自分チョーシにのってました。だから許して下さい。」

「むう、誠意が足りんな。ふふつ。なんてね、そんなことしないから怖がらないでね。怖がらないって

約束できるなら許してあげるよ。どうかな、できる？」

「はいっ、約束します。二度としません。だからお願いします。殴らないでください。」

……。今で分かったとは思いが俺は自分の事をヘタレだと思っっている。・数秒後。

「うん、いいよ。じゃあ約束。」

何ということでしょう。かわいらしい小指がこちらに向けられているではないか、ふれ合えるチャンスではないか、こんなについていることは今までなかったな、うん。これまでの俺の運のなさはこのためだったのか。俺はこの時初めて神に感謝した。

「う、うん。じゃあ約束。」

「嘘ついたら、針千本のーますっ、指切った！約束ね。」

おおー。長年空手をやってきたとは思えないほど、柔らかい指だった。幸せです。ふう〜。うん、風が気持ちいいね。

「幸せな気分浸っているところすまないが、小森氏、前にネコ耳の女の子が見えないか。」

なんでこう邪魔してくるかな。しかも鼻息荒いし、まったく、気持ち悪いな。もう少しだけでもいいからこの余韻を味あわせてくれてもいいのに。

「そうですね。見えますけど何か？」

「何って興奮しないのかい、君は？ネコ耳だよ、ネコ耳。話しかけてきてくれよ。」

「ちよっ、俺がですか？」

「そうだよ、君以外にだれがいるだよ、同志よ。」

俺にはそんな趣味はないし、都合のいい時だけ同志扱いするなっ。つたく。あまり人と関わりたくないんだけどなあ。しょうがないか。俺に期待してるみたいだし。って池田さんもかよっ。

「あれ、池田さんも好きなんですか？ネコ耳。」

「うん、だって可愛いじゃん。」

「俺は池田さんも似合うと思いますよ。」

うん、とても似合うと思う。さっき自分で言ってるんだが、そんな格好されたら俺もその趣味に目覚めるかもしれないな。

「アタシ！？アタシは似合わないよ、可愛くないし。そういうことだから、よろしくねリーダー。」

何か最後のリーダーってのはとってつけたような気もするなあ。

でも、池田さんに言われちゃあしょうがない、やるか。

「なあ、ちよっといいかな？」

ビクっ！！

まずい、かなり怖がられているな。やっぱりここは男の俺が話しかけるよりも、池田さんみたいなかわいらしい人が話したほうがよかったんじゃないか？それとも言葉が通じないのか？どうする俺。・

そうだ自己紹介をすれば安心してくれるかも、よしそうと決まれば

「えーと、俺は小森大洋、聞きたいことがあるんだけどちよっといかな夏澄ちゃん。」

しまった。名前知ってたら余計怖がられるよな。つい見えてたから言っちゃったよ。

「えっ、どうして私の名前を？それに耳がない。うん、もしかし

て和の民の人ですか？」

お、のってきたな。それに随分明るそうな子っぱいな。それに最後のはなんだ？

「和の民？いや違うけど。まあでも名前はそう！魔法とかで。見えただよ。」

「そうなんですか！すごいですね！魔法が使えるんですか。どこから来たんですか？なんでここに来たんですか？他にも魔法使えますか？」

いきなり饒舌になったなあ。でも質問が多いな。

「ちよ、ちよつと待ってね。答えることが多すぎて分からないや。とりあえずどこか休める場所あるかな？」

「あ、ごめんなさい。うちの村にお客さんなんて久しぶりだったから。。。じゃあ、村に案内しますね。」

「そう言ってもらえるとありがたいよ。でも他にも仲間がいるから、その人たちもきみの村と一緒に連れていいてもいいかな？」

「え、はい。もちろんいいですよ。」

「ありがとう、夏澄ちゃん。おーい、みんなこの子が村に連れて行ってくれるって、出てこいよ。」

「うつつす、やっぱ先輩流石つす。」

「グツジヨブ、小森氏。仲良くなるだけでなく、村まで案内させられるなんて。」

ふふ、その指へし折ってやろうか。

「すごいよ、小森君。やっぱり小森君に頼んで正解だったね！」

「いやあ、それほどでもありませんよ。これ位ならいつでもやりますよ。」

「わあ、お仲間さんいっぱいいるんですね。今日はお客さんがいっぱいです。」

「？俺たち以外にも誰か来たのか？」

「そうなんですよ！かつこいい男の方が一人来ました。その人も和の民のひとかと思ったですけど。きつとお兄ちゃん達といっしょ

ですね。」

ふむ、やはりイケメンは卑怯だな。さっきまでと態度がまるで違うじゃないか、クソッ。いいなあ。

「そうなんだ。それは置いといて、仲間を紹介するね。俺の右にいるのがにいる女の子が池田由希さん。」

「よろしくね。えーとなにちゃん？」

「夏澄です。15歳です。お姉ちゃんかわいいですよ。」

「そうかな!? 夏澄ちゃんの方が可愛いよ。」

いや、俺的には池田さんの方が好みだ。はっ!? 何を言ってるんだ俺は。話を進めなければ、

「じゃあ次な。俺の左にいて背が高いのが上沼健太。」

「おう。よろしくな。夏澄。」

「うーん、お兄ちゃんたち、体、おつきいです!」

そうなのか、上沼ははでかいが、俺はそれほどがっちりしてるわけではない。ネコ耳の人たちは背の低い人が多いのか？

「そして最後に一番端にいるのが吉野元喜さんだよ。」

「よろしく、夏澄氏。」

「むう、このお兄ちゃんは何か不思議な感じがします。でも、よろしくです。」

「だろうね。その感覚は正しいよ、夏澄ちゃん。」

「じゃあ案内してくれるかな。」

「分かりました。ついてきて下さい。」

「ちよつと待て下さいよ、俺を忘れてませんか、先輩。」

「おお、いたのか。」

「ああ、忘れてた。じゃあちゃっちゃんと自己紹介しちゃって。」

「紹介してくれないんですかっ。扱いが雑すぎませんか? まあいいですけど。俺は松田佑磨です。よろしく。」

「よろしくお願いします。」

「あれ、返事が何か適当じゃね。ちよつと反応薄くね。なんかこうときめくような反応が「さて、行こうかみんな。」ってまだしゃべ

「つてる途中でしようが。」

「えーと、村までちょっと距離があるんで、近道していきますね。」
「近道かあ。近くに越したことはないけど、近道すると何かあったりするのかな？」

「えーとですね。いつもは使わない道なだけですよ。ただ・・・」
「只？なにかな。ちゃんと覚えていなとか？」

「覚えてはいるんですけど、大人と一緒に使わないと使っちゃいけないって言われているだけで、でも今日はお兄ちゃん達がいまさら大丈夫です！」

「え？それってどういうこと？じゃあ遠回りしていったほうがいいんじゃないかな。」

「でも、さつき一人で来たお兄ちゃんと一緒に時は大丈夫だったから。それにさつきよりも人数も多いから、大丈夫ですよ。」

「さつき、言ってたカッコいい人のこと？」

「うん、そうだよ。そのひとのことだよ。」

「ほう、じゃあその道で行くしかないな。そうだよな、みんな。」

「「「おおー！！」」」

「いや、遠回りした方がいいんじゃない？」

「よし、決まりだ。近道しよう！」

「え？アタシの意見は？」

「時に男は曲げられないものがあるんだ。」

「はあ、どうなっても知らないよ。」

「皆の衆準備はいいかー！」

「「「おう！！！！」」」

「あともう少しでつきますよ。」

「ふっ、案外たいしたことなかったな。」

「結局何も出てこなかっただけじゃない。運が良かっただけだよ。わかってる？」

「分かっている分かってる。まあ、運も実力の内さっ。でも、もし何か出てくるとしたら、なにが来るんだ？」

「ナフィっていう小さい狼が出てきます。小さいといっても体長は1mあるので、だから子供だけだとこの道は通っちゃいけない事になっているんですよ。でも不思議です。さっきの人と来た時はわんさか出てきたんですけど。あ、もしかしてさっきの人がみんな退治しちゃったのかも。」

またその人があ、はあ。

「ああ、そうかもしれないね。でもその人の名前は分からなかったのか？」

「そうですね。結局教えてくれなかったんです。はあ、聞きたかったなあ。」

「その人にも何かしら理由があったんだろうね。でも本当に何も出てこないなあ。」

「やはりモンスターが出て来ないとRPGらしくなですよ、小森氏、何か騒げば出てくるじゃないか。」

「それは絶対にだめです。さっきの人はそうやって、呼び寄せて、倒してましたけど、ホントーに危険なんですからね。」

なんですとあ。

「ふっそれは俄然やる気が出てきたなあ。それに、それだと前フリにしか聞こえんなあ。よしっ出てこいナフィー！」

耳を澄ませて、目を凝らすこと数秒、本当に出てきたと思う。そんな気配を感じる。でも考えてみたら、この地形はすごく不利だな。なにせ敵の姿が見えない。まずいな、でも今はまだ数は少ないはず

だ。かつこ悪いが、仕方ない。決断の時だな。

「みんな走れ、ここでは不利だ。敵が見えない、草の丈が低いところまで走って逃げる。行け！」

「だから危険だと言っただんですよう。」

まあ、やってしまったんだから、仕方ないじゃないか。夏澄ちゃん。イイとこ見せたかったんだよ。

さて俺は考えなければいけない。まず何をすればいいんだ？

・・・ 隊列を整えたほうがいいか。それなら

「夏澄ちゃん、池田さん、松田で前方をカバー、松田は女子二人を守れよ。」

「こういうときは、俺の存在覚えてるんですね。わかりました。やってやりますよ。」

「俺と吉野さんはステータスの確認ができるから中央で指示、吉野さんは前をお任せします。そして、殿は上沼しんがら、お前に任せる。頼むぞ。」

「了解した。」

「自分やるっす。見てて下さいよ。」

「では各自隊列を整えつつ走れ！」

隊列はよし。さて、次は、どう手を打つかな。

「小森氏、夏澄氏の様子がおかいんだが。」

ふむ、夏澄ちゃんの体力の消耗が激しいようにみえるな。仕方ない、少しペースを落とすか。

「ちよつとスピードを落とせ、夏澄ちゃん大丈夫か？」

「い、いえ大丈夫ですよ。ハッ、ハア、ハア、それに急がないと追いつかれちゃいますし。このままのペースで大丈夫です。」

「いや、案内役である夏澄ちゃんに倒れられたら元も子もない、スピードは落とす。みんな、一戦交えるかもしれない。覚悟だけはしとけよ。それとゴメン池田さん。言うこと聞いていれば、こんな目には合わなかったのに。」

「もうこうなっちゃったんだから気にしない！」

「は、はい。」

「だから次の指示お願いね、小森君。」

「わかりました。少し考える時間をください。」

どうする、どうする。もう戦うのは避けられない。なら少しでも有利な状況にもっていかない。まだこの草原を抜けるには距離がある。そして、敵の攻撃を一方から出来るような、大きな岩や、木、川もない。っということ、それらを背にして戦うことはできないということ。だが見方を変えればそういった障害物もないから逃げ続けることもできるな。なら考えられるのは、単純だがこれしかないな。

「円形の陣を作る中心には女子の二人を、外側を男で固める。移動しろ！」

「待つて、小森君は中心にいたほうが指示しやすいんじゃない？だからアタシは外側でいいわ。」

「待てよ、それだと池田さんが危ないじゃないか。やはり俺たちが外側を固める。」

「いまアタシを女の子扱いしなくていいわ。それに小森君よりアタシの方が武術の心得はあるから、心配しなくていいよっ。」

グサツと来るなあ。それはそれで男としてのメンツがたたないんだよなあ。

「ダメだ。それは認められないやっぱり池田さんは内側に。」

「今は男だ女だ言ってる場合じゃないって言ってるのっ。戦える人が前に出てそうじゃない人は下がってて。」

「ウツ、でも・・・わ、分かったよ。そこまで言うんなら、約束してくれ、本当に危なくなったら下がってくれ、お願いだから。」

少しの間ふたりはにらみ合い、目を閉じ顔をそむけながら池田は言った。

「分かったわ。」

「よし。じゃあみんな移動してくれ。それと夏澄ちゃん、何か武

器になりそうなものを持ってないか？」

「えーと。あ、持ってます。ハアツ、ハア、花摘み用のちっちゃなナイフでよければ。」

「いいね。それを上沼に渡してくれるか。」

「わ、分かりました。」

「自分途中で木の棒を拾ったんで大丈夫です。先輩使ってくださいます。」

「いや、でもなあ内側にいる俺が使ってもなあ。」

「なら僕に貸してくれないか小森氏。前に忍者をネットで調べたら、小刀の使い方が載っていてね。知識のある僕も使えるんじゃないかと思ってね、どうだろうか？」

「妙なもん調べてるな、この人は。」

「分かりました。じゃあ吉野さんがこれ使ってください。チツ、ナフィがだいぶ近づいてきたな。みんな構えろ！」

草むらにはナフィが6頭位いるかな。俺はリーダーとしての役割を果たさなければ

「みんな村まで突っ切れればいいんだ。無理に倒す必要はない。気を付けていけっ！」

そしてその言葉を最後に5人の若者の初陣が始まった。

「ハアツ！」

気合とともに上沼は木刀を振り下ろす、狼の額に当たる。続けて二撃目を下から顎を狙って振り上げる。そこにはただ力任せに叩きつけるだけで、技術も何も無い。あるのは力のみ。

「シネツ、この狼がっ！」

そこに2頭目が上沼に襲いかかる。寸でのところで気づきかわすが少し遅かった。手の甲から血が滴り落ちる。その血を見て心なしか狼たちが興奮しているようだ。

「ツツ、クソがっ。」

そこに声がかかる。

「上沼、周りをよく見る、一人で戦うな。他のやつらと協力して戦え。」

「うつつす！」

「敵は一人じゃないんだ、みんな、気をつける。」

周りをよく見るか、うん？吉野先輩？いつから俺のそばにいたんだ？

「上沼氏、落ち着いて聞くんだ。少しナフィ達の気を引きつけておいてくれるか。その隙に僕が奴らを仕留める。」

敵と距離をとりながら答える。

「了解つす。でもそんなことできるんスか？」

「もちろんだよ。きみがどれくらい引きつけられるかにもよるが、僕はこの中で唯一刃物を持っているんだ。それくらいできて当然だよ。」

「うつつす。じゃあやるつすよ。」

よし、気合入れる、俺つ。

「オラアツ、まとめてかかってこいやあ！」

大きく振りまわし、当てて気をそらし、かわし続ける。そして後ろに回った吉野は背中にナイフを突き立てる。狼の悲鳴が響く。やがてその声は小さくなり倒れた。

「じゃあつ」

「油断するな上沼つ。左前のナフィが弱ってるそつちを狙えつ。」

「うつつす。」

「次も頼むよ、上沼氏。」

後ろからは小森から小石での援護があり、初撃はのど狙いの突きだ。

「突きつ！」

だいふHpも少なくなっていたおかげもあり、一撃で倒すことができた。だがそこで不幸に見舞われた。木の棒が折れてしまったのだ。「やべえな。」

「下がれ、上沼つ。もうあと残り2頭だ。あとは他に任せて休んで

「いい。」

「えっ？もうそんな少しっすか？」

「そっだ。だからもういい。」

「うっす。」

「後は見てると良い、うちの勝利の女神を。」

池田はのびのびと戦っていた。それもそのはず、初めての寸止めなしの実践だ。武術家としてその力を存分に発揮できるのだから。

「はっ、やっ！」

飛びかかってくる狼をステップでかわし、着地の瞬間を狙い当てる。これを繰り返すことで、徐々にHPを削る。それに蹴りで敵を引きずり出し、そこを突く。戦いの中で池田の体術はより洗練されていく。より確実に当てるため、より少ない手数で相手を倒すため隙を作り出し、隙を突く。無駄のない動き。そこにはある種の美しさがあった。

「はっ！」

渾身の力を込めた正拳突きは敵の右の胸をとらえ、そして最後の1頭も動かなくなった。

「ふう、終わったかなあ？」

「うん、全員無事とまではいかないけど、なんとか終わったな。それにしても池田さんすごかったね。一人で4頭位引きつけるだけじゃなくて、うち2頭も倒しちゃうんだからね。」

「そんなことないよ、小森君が後ろから石を投げていてくれたからだよ。だいぶやりやすかったし。」

「いや、それでもすごいよ。やっぱり前に出てもらったのは正解だったな。」

「そうだろう、俺だったらかすり傷どころではなかっただろうな。」

「もう、おだてても何も出ないよう。それよりも手がナイフの匂い

で臭いから、すぐに洗いたいかな。」

確かにここら一帯ちよつと獣臭がきついな。

「夏澄ちゃん、終わったことだし、村に行かないか？」

「そうですね。皆さんお疲れ様でしたあ。すごかったですう。じゃあ村に向かいますしよ。」

「よし、急いでここを離れないと。みんな疲れているだろうが、あともう少し頑張ろう。」

「「「「「おお〜。」」」」」

3話（後書き）

初の戦闘シーンでしたが、伝わっているでしょうか？物足りない点はアドバイスをいただけると、うれしいです。

4話

長かった。やっと村が見えてきた。まあ道中アクシデントもあったが、誰も大怪我することなく、着くことができたのだから、良しとしようじゃないか。うん。……。すみませんでした。もう二度とあんな真似はしません。

村の周りには堀が掘られ、なかなか防御力がありそうな造りになっている。

「着きましたあ。ここが私たちの村、花風村です。みなさんお疲れさまでしたあ。」

花風村かあ。いい名前だ。端的にこの村を示していて、この情景がすぐ目に浮かぶな。

「晴志おじちゃん、ただいまあ。」

「お、夏澄ちゃん、おかえり。花はとれたかい？
人当たりの良さそうなおっさんだ。」

晴志 48歳 門番Lv43 Hp342 Sp201

当然だがネコ耳も付いている。おっさん顔でネコ耳は少々きついものがあるなあ。周りを見ても、みな苦々しそうな表情をしている。考えることは一緒か。

「うん、いっばいとれたよ！見て、見て！はいっ。……。あれ？袋が破けてる。いっばいとったのに。」

「うん。じゃあ仕方ないね。また取りに行こうか。今度はおじちゃんも付いてってあげるから。」

「ホントっ！約束だよ。」

「うん、約束。ところで後ろの人たちはお客さんかい？」

「うん！そつだよ。さっきのお兄ちゃんと一緒なんだって！ねえ、お兄ちゃんはどこ？」

「ちよつと前に村長さんの家で見かけた気がするなあ。行っておいで。」

「うん、行ってくる。じゃあまたねっ、お兄ちゃんたちっ。」

「ああ、またな。」

そして、夏澄は走り去って行った。

「ホントにあの兄ちゃんが好きなんだあ。」

「お待たせしてすみませんですな。旅人さん。遠いところから、わざわざお越し下さったのに。」

「いえ、大丈夫ですよ。あの、早速で申し訳ないのですが、どこか休めるところはありませんか？」

「ああ、お気づかい出来なくて、すみません。それなら奥に集会所があります。そこで休まれますと良いですよ。」

「ありがとうございます。お世話になりました。」

「いえいえ。これくらいどうってことないですな。」

俺たちは門番のおじさんに礼を言って、集会所に足を向けた。

「ふう、やっと座れた気がするなあ。」

「アタシたち、ずっとあるきっぱなしだったからね。」

「うん、確かにそつだ。だが、肉体的な疲れよりも精神的な物の方が大きいと思う。頭も痛い。」

「腹も減ったなあ。何か食えるものあるかなあ。」

「しかし、小森氏。僕たちこの世界のお金をもっていないよ。」

「それもそつだが、この世界は貨幣制度を取り入れているのだから？取り入れてなかったら、物々交換だろ。何も持ち合わせてない

なあ。着の身着のまままで来たからなあ。もうちょっと準備してくれば良かった。

「アタシは先に手、洗ってくるね。」

匂いが嫌だとか言ってたしな。でも俺はそれよりも・・・。

「ああ行つてら。でもどうしよ」。確かに俺たち金持っていないなあ。ダメだ。考える気が湧かない。先に一旦休んでから考えるか。」

「そうしよか、僕も疲れたからひと眠りすることにするよ。」

「ああ。おやすみ。」

気を緩めた瞬間、猛烈な眠気が俺を襲った。

イツツ！

奇怪な声で俺は目覚めた。もう夕方か、だいぶ寝てしまったな。

そこで俺は声の正体に気づいた。

「おい、どうした。上沼。」

「なんか、手が痛むんすよ。」

あ、忘れてた。こいつは怪我してたんだ。どれどれ。ふむ、血はあまり出ていないが、傷口から青くなってる気がするな。顔色も悪い。

「これはナフィにやられた傷だろ？うん、毒性があったのか？」

・・・早く医者に診せた方がいいな。てか、この村医者いるのか？考えててもしょうがないしなあ。

「よし、俺が探してくるから、ここで待ってる。」

「あざっす、先輩。」

うむ、なんだかいつもの元気がないな。急がないとまずいかもな。

ん？誰かの泣き声？それにあやしてる声も聞こえる。はっ！まずいな。急がないと。夏澄ちゃんとか、さっきの門番のおっさんに会えれば一番いいんだが。人見知りしてる場合じゃなよな。はあ。

仕方ない。

「おばあちゃん、すみません。ちょっといいですか。」

近くにいた元気そうなお婆さんに話しかけた。

「ん？なんじゃい若いの？」

「この村に医者つていますか？」

「イシャとはなんじゃい？」

そうかしまった。医者という概念がないのか。どう説明すればいいんだ？むう。

「えーとですね。この村の外にナフィって魔物がいますよね。それに攻撃されて仲間が苦しんでるようなんですが・・・。」

思い浮かばなかったのであったことをそのまま話した。

「それを早く言いんしゃい。全く、回りくどく言いよって。して、その傷はいつ頃付けられたんじゃ？」

「いつだったかな。こつちに来たのは朝方だと感じて、そのあと何時間が歩いたから・・・。」

「えーと、昼ごろに受けたと思うんですが。」

「なんと、だいぶ時間がたつとるの？急がんと死ぬぞ。わしが声をかけてくるから仲間の元に戻るときんしゃい。集会所でいいかの？死ぬ！？上沼が！？」

「え、はい。そこで大丈夫です。」

「どこ行つてたの？小森君。今上沼君が大変そうなのに。」

「知ってる。そんなことよりも・・・。」

「ああ、分かつてる。今、人を呼んできたんだ。もう少し我慢だぞ、上沼。」

「自分は大丈夫つす。先輩あざつす。ツツ。」

予想以上にまずいかもしれないな。ホントに死んじまうのか。クソツ。なんで俺は・・・。」

そこに聞きなれた、高い声が響く。

「お兄ちゃんたちごめんねっ。放っておいて。夏澄が足、遅いからこんなことになったのに・・・。」

全部俺の責任だ。こんな時に他人に任せるしかないなんて。

「いや夏澄ちゃんのせいじゃないよ。それよりも早く治療をっ。」
みんなを制すように、奥からネコ耳のおばさんが出てきた。

夏子 45歳 薬師Lv58 Hp231 Sp261

「夏澄。ちよつと離れてなさい。」

「うんっ、わかった。お兄ちゃんたち安心して。夏澄のお母さんはね、村一番の薬師なんだよ。だからきつと大丈夫だよっ。」

「夏澄、ちよつと静かにしてなさい。それと怪我してない人は外にかりん夏鈴、薬草持ってきて。」

続いて手足がスラツとした美人な人が入ってきた。

夏鈴 18歳 薬師Lv32 Hp189 Sp204

「はいつ。」

「夏鈴は手伝つて。それ以外の人は外に出てって。」
有無を言わせない指示により、俺たちは外に出た。

「・・・俺たちは扉の前で立ち尽くしていた。

「お兄ちゃんたちっ。夏澄の家に来て休んでよ。疲れてるでしょ？」

「あ、ああ。でも。」

「元気になった時に、お兄ちゃんたちが元気なかつたら、きつと健

太兄ちゃん、がっかりするよ。だから行こうよ。」

「小森氏……。行こう。ここにいっても僕たちにできることは何もないんだ。」

「何もない、か……。」

「そうですね……。」

拳を固く握り、口を真一文字にするしかなかった。このやり場のない気持ちを抑えるにはこうするしかなかった。

俺はなんて無力なんだ……。

「夏澄ちゃん、さつきはありがとな。」

自分で言っていて何に対するありがとうなのかは分からなかった。

ただそんな言葉が口から洩れた。

「えへへ、どーいたしましてっ。」

その声を聞くと、いくばくか気持ちが明るくなった。

テーブルに暖かそうな飲み物が置かれた。

「どーぞっ。」

「これは？」

「これはね。村で飼ってるアラハって言う、大きな牛から採れたアラハ乳だよっ。」

「へえ〜。そういえば何も食べてなかったこと忘れてたな。」

そう考えると余計腹が減った。これだけだと足りないなあ。

「なあ、お願いがあるんだが何か食べ物をくれないか。」

「うんっ、いいよ。夏澄。料理、上手だから期待して待っててね。」

「おお〜、夏澄ちゃんは料理が作れるのか。すごいな。」

「全然すごくないよっ。こんなのふっ〜10歳くらいまでに覚えるし。」

「へえ〜。そうなのか。一昔前の日本もそうだったけどなあ。池田さんは作れるのかな？ 気になるなあ。」

あれ？全然目が合わないんだけど。

「なあ、池田さん。池田さんって」

「それ以上聞くのは酷ってもんだよ、小森氏。」

「たしかに、そうだな。だってさっきから、ぜんっぜん目が合わないし。」

今一瞬睨まれたような。これ以上言つと後が怖いな。黙つとくか。……。

間がつらいです。どうしよう。無言の圧力がかかっていますよ。ええ。

「はいっ。できましたよ。どうぞ召し上がれっ。」

ナイスタイミング！見た目もきれいに飾つてあるな。すごいな。

「じゃあ、いただきます。うん！おいしい。アラハ乳つて甘い気がするんだけど、砂糖とかが入っているのかな？」

「ちがいますよ。もともと糖分が入っているんです。この乳から砂糖をとってるんですっ。」

「へえ、そうなんだ。なるほど。」

そのあと俺たちは空腹であつたため。無言で食べ進めた。

「……ごちさまでしたー！」「」「」

「おいしかったよ。夏澄ちゃん。」

「はいですっ。喜んでもらえてうれしいです。」

「ダメだ、食べたら眠くなつたな。ふあ。」

「じゃあ寢床を用意して来ますから待つて下さい。」

その時だった。突然扉が開いた。

「あ、長老様だっ。こんばんはあ。」

さっきの婆さんだ。長老だったのか。ちゃんと見とくんだったな。

今見てみるか

花風翠 かふうみどり

89歳

長老Lv99

Hp98

Sp414

ふむ、LvのわりにはHpがすくないなあ。そうか、歳か。老いとは恐ろしいな

「いつも元気じゃの。ほっ、ほっ。其の者達に寝床を用意する必要はないぞ。夏澄ちゃん。」

「え、どうして？お兄ちゃんたち疲れてるんだよ。休ませてあげなきゃ。」

「じゃから、その必要はないと言っとるじゃろつが。若いのはわしの家に来んしゃい。」

そう言い切ると背を向け、ばあさんは歩いて行ってしまった。

はあ。強引だなあ。まあ、泊めてくれるっていうんならどつちでもいいがな。

「じゃあな。夏澄ちゃん。今日はありがとな。」

「うんまたねっ。お兄ちゃん、お姉ちゃん。」

俺たちは別れを告げて婆さんに付いて行った。

「着いたぞ。ここがわしの家じゃ。」

でかいな。家を構成する木の一本一本が太い。流石は長老と言ったところか。

「なあ、ばあさん。」

「長老と呼びんしゃい。」

目にもとまらぬ速度でネコパンチが飛んできた。痛くはないが、むかつくな。このババアが。

「失礼いたしました。長老。」

「失礼いたしましたは要らんっ。不愉快じゃ。」

「……俺だつてもう大人だ。抑えるんだ、俺。」

「長老、これから俺たちは何をするんだ？」

「ここで生き抜くすべを叩きこんでやる。さつき見たいに頼られてはかなわんからな。」

「へえ、そりゃあ。丁寧にも。さすがババアだ。」

「ウツ。」

今度は力の籠ったネコパンチが来た。そして何事もなかったかのように家に入るよう、勧める。いい神経してんな。このババア。

「さあ、上がりんしゃい。」

うん。俺は大人、大人だ。これ位どうってことない。

「……おじやましまゝす。」

俺たちは広い客間に案内された。

「まあ、座りんしゃい。ただし口の悪い童は正座じゃ。」

ババアって言ったの根にもってやがんな。

「まずは紹介しようわしの孫娘の花風未希^{みき}じゃ。この孫がこれからお主らの疑問に答えてくれるでな。」

「みなさん、よろしくお願いします。分からないところはなんなりとお聞きください。」

あのババアの孫とは思えないくらい美人な子だなあ。クールビューティーって感じかな。礼儀も正しいいな。

花風未希 23歳 長老見習いLv34 Hp159 Sp211

少し年上だけでこんなにも俺達と違うのか。へえ。

「ってか、長老が説明してくれるんじゃないのか？」

「わしは若い者に任せて寝るのじゃ。それと何も知らん若造が口答

えするでないつ。」

ムムツ。

「ああん？何も知らないわけじゃねえぞ。俺にはあんたの名前と歳が見えるぞ。」

まあ他にも見えるがH Pだなんだと言ったところで分かんねえだろつし。

「ほつほつ。馬鹿も休み休み言いんしゃい。そんなこと知つとるわけないじゃろうが。」

「いやあ、これが分かるんだな。じゃあ言つてやろう、花風翠89歳だろ？」

「おやまあ、こりやたまげた。今日は妙な童ばかり来るの。」

「だろ。」

「お主魔法が使えるのかの？」

「ん？さあな。俺にもわからん。」

おお。どうした急にババアが笑いだしたぞ？

「ほつ、ほつ。分からんで使つんじゃ駄目じゃのう。やはり知識を教え込まなければのう。」

クツ。勝つたと思つたんが。墓穴を掘つたか。

「未希教えておやり。それと全員が理解するまでは寝かしてはいけないよつ。」

「ババアツ、鬼かよ。」

「ほつ、ほつ。全員が理解したら浴場に連れつておやり、だいぶ汚れておるからの。」

おお、気がきくじゃん。

「はい、分かりました。それとおばあ様、何から教えて差し上げればいいのでしょうか？」

「ふむ、そうじゃのう。地理と8元素、職業、後、この村について教えておやり。」

「分かりました。」

未希さんが了解の意を表す。ウゲツ！覚えることたくさんだなあ。

こっちは疲れてるのに。容赦ねえな。

「それではみなさんのお名前をお聞かせ願えますか？」

「ああ、はい。俺は小森大洋です。」

「分かりました。では、次の方お願いします。」
結構事務的に進めるんだな。この人は。

「私は池田由希です。」

「次の方。」

「僕は吉野元喜。」

「これで最後ですね。」

「ああ。」

「ああ、じゃないですよ。先輩。俺を忘れてますよ!。」
そうだった。これはもうお決まりパターンだな。

「申し訳ありません私としたことが。ではよろしくお願いします。」

「俺は松田佑磨です。よろしくお願いします。」

「それでは、いよいよ始めましょうか。ふふつ。」

怖いよ。この人なんで笑ってんだよ。

「終わるまで眠れませんかので覚悟して下さいね。」
「いやーっ!」

なんかあのババアの孫なんだなって分かった気がする。はあ。
今夜、果たして眠れるのだろうか？

5話

これから末希先生の特別講義が始まるうとしていた。

「では、よろしく願います。」

「「「「よろしく願います。」」」」

「皆様には私がこの世界に対して知っている事の中でも基礎となることをお教えいたします。つまりこれを理解できないならば、旅などせずこの村で働いていただきます。」

「さすがは長老見習い。むげに追いついたりせず自分のもてこき使いつもりか。面白い。」

「後、質問がある場合は拳手をお願いします。」

「まずは身近なところから。今私たちが住んでいるのは、大猫王国です。日の大陸の最南端でございます。その一番南にあるのがこの花風村です。そして北には真猫帝国があります。この国と我が国は敵対しており、国境付近では争いが絶えません。」

「ちよつと待て。なんでそんなことをさらつと言えるんだ？戦争が起きてるってことは多くの人が死んでるんだぞつ。」

「いいたいことはそれだけですか？それに質問があるなら拳手をしてください。戦争なんて今に始まったことではありません。それをいちいち騒いでどうするのです。」

「お前つ。」

「落ち着くんだ、小森氏。今回、僕たちは教えてもらう立場なんだ。なるべく黙って聞こうじゃないか。」

「クソツ。」

確かにそれは事実だけど、事実だけよつ。

「では続けます。今後こういうことはないように。東には和国、西には牙狼国、この諸国とは同盟を組んでおり、商業、軍事ともに交

流があります。」

「ちよつと質問いいかい？」

「どうぞ、吉野様。」

「私たちは道中で話の民と間違われることがあったんだが、話の民とは一体どういう人なんだい？」

「例を挙げて説明たしましょう。わたしたちネコの民は猫を祖としています。牙狼国は狼を、そして和国は猿を祖とする人々でございます。この説明でお分かりいただけましたか。」

「よく分かった。ありがとう。」

「他にも遊牧民族国家として鷹の国があります。ただしこの国は季節によつて各地を転々とするため、中立国と言った立場をとり、商業のみの交流があります。大まかに分けて大国と呼ばれるのはこのあたりですね。」

ふう。気持ち切り替えなきゃな。

「俺も質問がある。」

「どうぞ小森様。」

「この日の大陸以外に他の大陸は存在しないのか？」

「それについては、私は存じません。ただ、伝説や神話にはたびたび他の大陸がありますが、今となつては、確認する術はありません。」

「なぜだ？鷹の国の人は飛べばすぐに確かめられるんじゃないのか？」

「それはできません。今は鷹の民たちは翼をもつてはいませんが、有力な説では進化の途中で翼が無くなってしまったと言われています。」

「なるほど、わかった。」

「ここでいったん地理はお終いに致します。」

「次に8元素についてお話します。みなさんはこの世界を構成しているのは何かご存知ですか？」

「もしかして、その8元素ってやつか？」

「もしかなくてもそうです。案外勘がよろしいので驚きました。」
ムツ。いちいちむかつくな。

「それではその8元素は何かご存知ですか？」

むう、俺のゲーム経験から行くと・・・。

「火、水、雷、風、土、光、闇・・・。後は分からないな。」

「これまた驚きです。7つもご存じだとは。」

未希は驚嘆した。

驚いてるな、ふつ。いい気分だな。これ位俺にかかればどうって
ことないんだよ。

「最後の一つは金です。」

ふむ、金か。そういうゲームもやった気がするなあ。

「それでは一つずつ説明いたします。これは言葉だと長くなります
ので紙に書いて説明いたします。」

火の元素 火、力強さを表す

水の元素 水、柔軟さを表す

雷の元素 雷、瞬間的な力を表す

風の元素 風、身軽さを表す

土の元素 土、堅牢さを表す

光の元素 光、清らかさを表す

闇の元素 闇、魔性を表す

金の元素 金、意思の強さを表す

この説明で満足いただけましたか？」

「質問がある。子の元素同士で優劣はあるのか？」

「いえ、それはございません。しかし魔法として使う場合は水は火
に勝りますね。」

「魔法として？この元素は魔法以外にも使うのか？」

「ええ、そうです。代表的なのは身体強化と武器の強化ですね。」

「それって魔法じゃないのか？」

「いえ、違いますね。もちろん、そういった魔法もあると聞きますが元となる力が違います。魔法は魔力を、私達が闘術と呼ぶ技能は精神力を元手にします。」

そうか、俺の周りには魔法を使えるやつはいなかったからSPと表示されてたのか。

「ありがとう、すごく助かった。」

「それは何よりでございます。しかし、魔法、闘術の原理は同じでございます。それにつきましては後日、兵舎に行かれて専門の方にお聞きした方がよろしいでしょう。」

「分かった。じゃあ話を続けてくれ。」

「いよいよ後半になりましたね。皆様理解力が素晴らしいので、私感心いたしました。」

なんで上からなんだよ。ほめてるように聞こえねえよ。

「職業、でしたね。職業には大きく分けて二つ技能系と魔力系がございます。これは先ほど申し上げた通り、力の元手にとって分類されております。」

あと、扱いは難しいですが、他にも複合系といったものも存在いたします。この系統の代表格は魔法剣士や勇者、英雄でございます。この職業は転職を説明する際に詳しく申し上げますが、転職困難な物ばかりでございます。

続きまして、技能系について説明します。この技能系職業の特徴はそれぞれ固有の技能が存在すると言われています。

これについても例をあげて説明いたしましょう。私は現在長老見習いという職業に就いています。この職業には知の伝達といった技能があります。内容はこういったものは言えませんが、このように固有技能があるのは確かでございます。

もうひとつ例を出しますと、夏子さまのような薬師。これには、薬草判別という技能があるそうです。読んで字の通りに考えていた

だければ、よろしいかと思われます。

次に、魔力系職業についてご説明いたします。これには魔法使い、僧侶、神官といったものが含まれます。

魔法にも系統があるようですがここでは省略させていただきます。魔法の習得方法についてはですが、他の魔法使いに師事して習得する場合、文献を読み独学で覚える場合、独自に作り出す場合といったものがあります。特に後者の二つは、相応の努力と才能が必要でございます。

このあたりで職業についての説明は終わりますが、何か質問はありますか？」

「あぁないな。」

誰かに小突かれて横を見ると

「ねえ、ホントに分かったの？」

不安そうな表情をした池田さんがいた。

「まあ、これ位なら男子だったら誰しもゲームで経験があるからなみんな分かってると思うぞ。」

「そうなの！？むう。じゃあ後で詳しくゆっくりと教えてね。」

「え？あぁ、分かった。約束だな。」

「うん、約束だね！」

「そこっ、私語は慎んでください。」

「すみませんっ。」

「あぁ、悪い。」

「反省の色がうかがえませんが、まあいいでしょう。」

次は先ほど触れた就職・転職についてです。

就職、つまり初めの職業は家系やどこに属しているかによって決まります。ほとんどが家系ですね。私のように。

転職についてですが、これは普通の一般人にはあまり縁がありません。なぜなら家系でその後の人生が決まってしまうからです。」

家系で決まる？俺たちの世界ではあまり考えられないが、こっちではそういうこともあるのか。

「深く関わってくるのは、あなた方のような冒険者や兵士などです。それではどのように転職するのか、一番簡単なのが神殿によって神様の力を借りてすることです。他には有力な魔法使いに魔法で変えてもらうこと。ある特殊な条件を満たすことで変わることです。これについては強制ですので注意してください。」

神殿についてですが、祀っている神様によって転職出来る職業が限られているようです。たとえばこの村の神殿では下級の神様のよう
うで戦士、剣士、騎士にしか成ることができません。

また転職の際の注意事項ですが、前に就いたことがある職業に関連する職業ならば、一定の熟練度がありますが、技能系から魔力系などといった、関連の薄い職業では熟練度の引き継ぎがなされない場合があります。」

ここではどうやらLvの代わりに熟練度のようだな。だが、ゲーム経験がなければ一度に覚えるのはきついなあ。

「最後に村についてですが、これについては今日はもう遅いのでこの辺りにしましょう。」

「お、意外と優しいじゃんかよ。」

「誤解しないでください。もう遅くて案内できないので止めると言っているだけです。明日は早く起きて村を見回りますのでその準備をしておいてください。それでは、浴場にご案内しますので付いてきて下さい。」

「はあ、やっと、終わったか。長かった。」

俺は不意に一つの重要なことを思い出した。

「なあ、花風。上沼の様子を見に、途中寄り道してもいいか？」

「その必要はありません。」

「はあ？どういう意味だっ。」

「そのままの意味です。あえて言うならば、もう心配する必要はないということですよ。」

「じゃあ、つまり。」

「そうです。もう毒抜きは終了し、今は眠っていることです。」

「ほんとかつ！」

「だからそう言っているでしょう。」

「いや、ありがとう。未希。」

「名前で呼ばないでください。ぞっとします。」

「ああ、悪い。でもうれしいなあ。」

見るとみんな笑顔だった。この時のみんなの笑顔は当分忘れられそうにない。

「よかったね、小森君。」

そういいながら、俺に抱きついてくる池田さん。

「ちょ、池田さん！？そんなことされて、うれしくないわけじゃないけど離れてっ。」

「あ、ごめん。アタシ。つい。」

「「ひゅゝひゅゝ熱いねっ、お二人さんっ。」」

その時俺は上沼が助かったことがうれしくて、池田さんが離れてしまっって後悔して、二人のガヤがウザかった・・・。

5話（後書き）

読んでくれた方々お疲れ様でした。

今回はこの物語の設定なるものを書きました。

そのため説明でごちゃごちゃしたり、堅苦しツかったと思います。
これからも続いていきますので、どうぞよろしくお願いしますっ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1891ba/>

2012年12月22日（仮）

2012年1月9日23時54分発行